

### C. ケアウィル講座の評価結果

初年度の講座終了後に受講生に対してアンケート調査を実施した。図10に集計結果を示す。

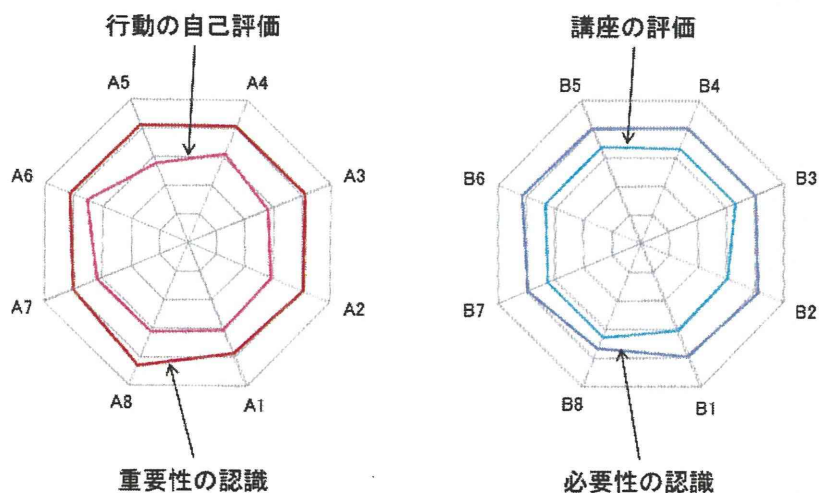


図10：受講生による事後評価（受講生平均）

この結果から以下のことが推量される。

- **自己評価**：どの項目も同程度の重要性認識であるが、成果の重要性認識が他よりもやや高い(A8)。より良いプランを作りたいという気持ちが強いと思われる。社会的意義の認識はやや低い(A5)。一方、プランを検討するための情報は豊富に持っていると思われる(A6)。
- **講座評価**：どの項目も同程度の必要性認識であるが、成果の必要性認識が他よりもやや低い(B8)。これは調査する必要がある。どの項目も必要性のレベルに対して講座の評価が1点弱低いことから、講座に改善の余地があると思われる。

### D. おわりに

ケアウィル講座参加者の自己評価と講座自体の評価を、講座を知識創造場とみなして「知識の連続再構成モデル」に基づいた評価票を作成し実施した。自己評価と重要性、講座評価と必要性について、それぞれまだ大きな隔たりがあり、参加者個人としても、また講座運営者としても心構えやシステムに改善の余地があることが示唆された。終了者の講座への感想の分析をおこなうとともに、終了者の会において具体的改善策を検討し、次年度の講座に活かしていく必要がある。

E. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

F. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許出願

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

G. 参考文献

- 1) 中森義輝：知識構成システム論，丸善株式会社，2010.

## ケアウィルにおける講座修了者の会の 活動の場の設定と運営設計に関する研究

研究分担者 小林俊哉 九州大学科学技術イノベーション教育研究センター 特命准教授  
(平成24年3月末まで富山大学地域連携推進機構地域医療・保健支援部門 特命教授)

### 要旨

本研究事業では、ケアウィルモデルの検証のためのアクションリサーチを推進するために、ケアウィル講座修了者による「講座修了者の会の活動」の実施を重要課題としている。この活動では、講座修了者がケアウィルを表明した後に1) その実現の過程でコミュニケーショントレーニングを重ね、職場以外のつながりを得ること、2) 自律的な社会支援の一環としてその成果を社会へ還元することの二つの支援を実現することが含意されている。本報告では、そのような狙いを具体化するための会の活動の場の設定と市民と専門家集団が連携した自律的な会の運営設計のあり方について記述する。

### A. 研究目的

本研究事業では、退職時の在宅生活から要支援・要介護に至った際の退職者が望むサポートへの意思決定をケアウィルと新たに定義し、退職者自身によるその表明と実現に向けたケアウィルモデルの検証のためのアクションリサーチを推進している。研究目標はケアウィル講座修了者が、ケアウィルを表明し、その実現過程で必要なコミュニケーショントレーニングを重ね、職場以外のつながりを得ることと、講座修了者の退職後の生活基盤を検討することにある。また本研究事業においてはその成果を社会に実装するためのモデルの検討が求められている。

以上の課題を実現すべくケアウィルモデルの中に、講座修了者の知識・スキルの発展的増進を目指した「講座修了者の会（仮称：ケアウィル会・以下ケアウィル会と称する）活動」の組み込みが計画された。上記の課題を効果的に実現するための場の設定はどうあるべきかを明らかにすることが本研究の目的である。

### B. 研究方法

ケアウィルモデルは、退職世代への有効なライフプランニングの作成方法の学びの場を提供するという生涯学習の側面と、研究成果の社会での実装を実現するための研究推進側とケアウィル講座受講者・修了者

を含む社会との接点を強化・拡大・継続するというコミュニケーションの場という二つの側面がある。

研究分担者は、平成 17 年度より市民と専門家のコミュニケーションの促進という立場から科学コミュニケーション事業「サイエンスカフェ」の研究・教育実践や市民のニーズを取り入れた組織・地域作りを目的として内閣府との連携講座「地域再生システム論」を展開してきた。これらの経験を元に、今回受講生のニーズを具体化することを目的に上記の活動をモデル化したケアウィル会活動の場の設計を試みた。

サイエンスカフェは文部科学省、日本学術会議等の政府関係機関を中心に新しいタイプの科学技術理解増進・科学コミュニケーション活動として科学技術振興機構（JST）等を通じて積極的に支援を進められたものである。研究分担者は平成 17 年度以降、「サイエンスカフェ石川」の活動に参画している。

サイエンスカフェにおいては、専門家は参加者である市民側の専門的知見へのニーズを知り、市民は専門家との交流の中で専門的知見への理解を深め自律的な判断に資することが期待されている。

今回、ケアウィルモデルの目標として退職者世代による自律的な会の運営を促進・強化し、参加者の自己実現を支援することが重要な狙いとされている。このことから、講座を修了者である市民から専門的知見ニーズを把握・共有し、専門家との接点を持つ場のモデルとして、ケアウィル会活動の場の中にこれらのノウハウを組み込みケアウィルモデルの検証のためのアクションリサーチを実施する必要がある。

以上の観点に基づき、ケアウィル会活動はケアウィル講座修了者のニーズ抽出の場として位置付けた。同時にケアウィル事業そのものを講座運営側（研究側）と講座修了者が協働して支えていくための場とし

ても機能する設計がなされる必要がある。

ケアウィル会の主たる目標として、講座修了者は、今回作成したケアウィルプラン経過報告会や勉強会等の場として発展させていくことが重要であるとの方向性が研究会での検討によって明確となった。また、この柱の事業を展開するために、カリキュラム（老年期における固有のニーズなど）、プログラム（ケアウィル講座の開催時期など）、システム（ケアウィル事業のフロー）という 3 つの自律的な運営のための骨組みを組織運営の中心として位置づけ、個々の持ちうる資源を最大限に活用しながら展開していくことが講座修了者と研究側の協働の接点になるという仮説をケアウィル研究会を得て設定した。

### C. 結果

ケアウィル会活動の前段階として、平成 24 年 3 月 3 日の第 1 期ケアウィル講座終了の 1 ヶ月後の 4 月 7 日の土曜日の午後に、講座修了者が講座内で作成したプランの発表会を実施した。ここで抽出されたケアウィルプランでは、参加者のプランに本ケアウィルの継続的活動の意向が多く示された。また、プラン発表後の学民（受講生と専門家）の協働による検討会においては、

- 1) 定期的なケアウィル会の運営により、自律的なケアウィル会の組織体制基盤の整備を行なう
- 2) ケアウィルプランの継続的な更新及びケアウィル会のメンバーと関係専門家とのコミュニケーションの質の向上により「健康」に加え「生きがい」という側面からもケアウィル会の意味を模索する
- 3) 学民連携の新たなモデルとして市民が自律的に運用する組織に対する専門家の積極的な関与のあり方について検討する

ことの重要性が示され、定期的に上記3つを検討する場を設定することが24年度の活動の方向性として示された。この検討会においては専門家と講座修了者の対話のみならず講座修了者間においても活発な意見交換が行われ、今後の講座修了者の自律的な活動運営への移行の可能性が示唆された。

#### D. 考察

ケアウィル会活動については、当初サイエンスカフェをモデルとした場の設計が検討された。しかし、ケアウィル講座修了者によるケアウィル会での活動が、ある一定水準の自律性を担保しているため、彼らが必要とするケアウィルプラン充実化のための情報提供の在り方を精緻化することが研究事業としての主な検討課題に思われる。

一方、ケアウィル会での議論の内容に関しては、その内容がそのまま組織体制のあり方につながることを示唆されるため、24年度の当該研究分担者の役割は前述「地域再生システム論」での活動を応用した、学民連携を主体とした組織運営のあり方に関するニーズの抽出と、自律的な社会支援の一環としてケアウィル会を社会へ還元するための広範なシステムを設計することに思われる。

ケアウィルプロセスモデルは退職後に必要な健康・生きがいの側面に関する情報を収集し、望む人生のあり方の意思表明することがその導入部である一方、そこで紡がれた講座修了者間における繋がりを維持・向上させていくことがケアウィル活動をより広範に展開させていく為には重要である。講座からケアウィル会の一連の実践を観察・介入・検証することによって市民と大学との協働で展開するケアウィル運動の実現可能性を検討することによって、今後のケアウィル会活動の運営設計に関する主たる課題が抽出されたと言える。

#### E. 結論

今後抽出されたこれらの課題をケアウィルモデルの観点から精査していくことが当該研究者の今後の主な活動と考え、以下にあげる研究課題の明確化したことをもって23年度の研究報告として結論付ける。

##### E-1 生涯学習継続の場としての機能

ケアウィルモデルにおける生涯学習機能の担保として以下の機能を構築する。

ケアウィル講座修了者、各位が持つ老年期の課題に立ち向かう効力となり得るような知識提供の場やウェブサイト等を活用した交流促進の新たな仕組み提供する。これにより講座参加者の多くが課題とする初老期の生活の質に関する知識の創造を支援する。

##### E-2 研究事業への講座修了者の参画促進

ケアウィルモデルを、より退職世代のニーズに合ったものにカスタマイズし、汎用性を高めるための、講座受講者・修了者へのアクションリサーチを精緻化する。具体的には、カリキュラム（退職世代が求める内容の充足等）、プログラム（ケアウィル講座開催の時期・時間帯・場所等）、システム（ケアウィル運動に向けた事業展開の方法）等のケアウィル事業の自律的な運用への改良・改善に関わるニーズの収集機能である。

##### E-3 同窓会機能を持つ場の設計

本ケアウィル事業が自律的な社会支援機能の一環として展開するための場の設計として以下の2点を念頭に置いて継続的發展をねらう。

- ① ケアウィル会活動の場は、講座修了者の自律的な活動を促進できるように、研究側からの片方向の情報提供だけではなく、多角的な対話の生まれる環

境として場をデザインの再設計を行なう。

- ②その場合にケアウィル会活動が講座修了者の「しなやかな」コミュニケーションのトレーニングでもあることを重視し、会員の活発な問いかけと協調を促す介入を行なう。

#### F. 研究発表

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

#### G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許出願  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし

#### H. 参考文献

- 1) 小林俊哉：「北陸地域における科学コミュニケーション活動を通じた大学と地域の連携」北陸地域政策研究フォーラムー北陸地域における地域研究ネットワークの形成に向けて。福井県教育センター。2012.
- 2) 中村征樹：サイエンスカフェー現状と課題」。科学技術社会論研究, 5:31-43, 2008.

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ
なし							

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
なし					



リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。